

市制施行60周年！

ふじいでらの近現代を語る

4 藤井寺経営地と、

大屋霊城の花苑都市構想

藤井寺市は、現在6万人以上の人々が暮らしており、多くの住宅が建ち並んでいます。その中には、村であった時代の街並みが残っているような場所もあります。また、それとは別に、宅地開発で新たにつくられた住宅地もあります。現在の藤井寺市では、特色のある新旧さまざまな街並みを見ることが出来ます。

市域で宅地開発された住宅地の事例として、昭和2(1927)年3月に分譲が開始された藤井寺経営地があげられます。ここで言う経営地とは、現在のニュータウンの小型版のようなものです。大正12(1923)年に大阪鉄道の道明寺・大坂天王寺間が開通し、市域には道明寺駅の他に、藤井寺駅と土師ノ里駅が開業しました。藤井寺経営地は、



▲藤井寺経営地(『大鉄全史』より)



▲藤井寺経営地周辺の現状(赤線内が藤井寺経営地推定範囲、令和5年11月撮影)

大阪鉄道により、藤井寺駅の南側に新たにつくられました。ちなみに、同時期に大阪鉄道が宅地開発した住宅地としては、他に、恵我之荘経営地(大正13(1924)年12月、矢田経営地(昭和2(1927)年2月、白鳥園経営地(昭和2(1927)年3月)などがあります。

ところで、藤井寺経営地の宅地開発には、大屋霊城おやれいじょうという人物が関わっていました。大屋霊城さんは、都市での公園や緑地の必要性を説いた造園家で、理想の都市として、花苑都市かえんという考えを提唱した理論家でもありました。大屋さんの言う花苑都市とは、都市の便利さと農村の快適さ、双方の良いところをあわせ持った都市のことであるとされています。

このような考えを持つ大屋さんは、

大阪鉄道の藤井寺経営地建設にあたり、その設計の相談を受けることになりました。大正15(1926)年に二つの花苑都市建設についてという論文も記した大屋さんは、藤井寺経営地で花苑都市の構想を実践したと言われています。

では藤井寺経営地とは、実際にどのようなものだったのでしょうか。『大鉄全史』によると、その敷地は約35万9千平方メートルという、広大なものでした。藤井寺駅から幅約14・5メートルの幹線道路を敷き、その車道と歩道との間には街路樹としてイチヨウを植栽していました。そして、この幹線道路を中心として、幅約5から9メートルの道路が放射線状または方形に整然と敷かれていました。上下

水道が完備され、電燈、電話、売店、旅館、幼稚園などの諸施設も整っていました。また、球場と教材園もありました。ここで、球場と教材園について見ていきたいと思っています。藤井寺球場は、昭和3(1928)年5月25日に完成しました。大阪鉄道は、旅客をふやす方策として、沿線の新たな娯楽施設である野球場を建設したのです。開場した藤井寺球場では、昭和6(1931)年には全国中等学校優勝野球大会の大阪府予選の会場の一つとなるなど、各種大会などで使用されました。

また藤井寺教材園は、球場の南隣接地に、昭和3(1928)年5月末に開設しました。大屋霊城さんの設計によるもので、敷地面積は約7万2千平方メートルあり、大阪府下の小学校・中学校の児童・生徒の自然科学研究・観察のための資料を提供することを目的としていました。教材園の中央部には自然の松林を取り入れ、周辺に水中動植物養殖池を巡らせ、随所に果樹園、蔬菜園、樹木見本園、草卉園、運動場、温室、学校専用実習地などを配していました。大阪市内の学校120校に教材を提供し、多くの人々に利用されたようです。

藤井寺球場、藤井寺教材園は今はありませんが、幹線道路など、藤井寺経営地の街並みは、現在に継承されています。

(文化財保護課 新開 義志)